



フェローシップ・ニュース NO.33号



横田尤孝新理事を迎えました

平成21年2月4日の理事会において、法務・検察の要職を歴任されてきた横田尤孝氏を新たに理事として迎えることになりました。

アパリは今後さらに一層、法務省とも連携を含めていきたい所存です。なぜなら刑事司法手続きによって身柄を拘束されているときに効果的に回復支援を開始できるひとつのチャンスだからです。

< 新理事の略歴 >

横田尤孝 (よこたともゆき)

69年中央大学法学部卒業後、72年検事任官。東京地検特捜部検事、同副部長、奈良地検検事正、法務省保護局長、法務省矯正局長、広島高等検察庁検事長、最高検察庁次長検事を経て、2008年より長島・大野・常松法律事務所顧問。



左から近藤恒夫理事長、横田尤孝理事、島田尚武理事、尾田真言事務局長、奥田保監事、神山五郎理事

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2009年3月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所 (Asia-Pacific Addiction Research Institute) の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次:

新理事紹介 マニラのストリートチルドレン	1
国際協力活動の状況 PCM研修に参加して	2
薬物依存症と家族の対応 について...町田	3
ハイヤーパワーに導かれて...家族 大麻撲滅キャンペーン	4 5
入寮者からのメッセージ...アムス	6
「赤い糸」監修終了 警察庁モデル事業終了 新規会員募集中	7
アパリからのお知らせ	8

シンナーを吸うマニラのストリートチルドレン

先日マニラタイムスの日曜版にストリートチルドレンがシンナーを吸っている記事が掲載されていました。記事の内容は以下の通りです。

フィリピンは人口約9000万人のうち670万が覚せい剤またはMDMAを乱用していると政府の調査で報告されています。2008年国連麻薬レポートによると、世界で一番覚せい剤が流行しているのはフィリピンです。

また、フィリピンに150万人いるストリートチルドレンの約半分はシンナーを乱用し、特にラグビーと呼ばれる住宅用の接着剤を吸引しているとのこと。

アジアの5つのカトリック系大学の研究者が、薬物乱用の実態について20人(7歳~17歳)の子供たちの調査を行った結果、子供たちの日々の関心事は生活の糧を得ることで、それはストリートの中にあつた。まずお金を恵んでもらい、次に食べ物を恵んでもらい、そしてお金の無い場合は残飯を恵んでもらいます。一日に一回食事が出来ればいい方で、ゴミの中に入っている食べ物や水を飲み、お腹を壊して入院した子供もいます。また、彼らの家庭は子供を育てる環境として十分ではなく、自ら逃げ出してくることもあり、元々片親であったり、家族と暮らしている場合でも失業に近い状態であったりというケースも多いようです。

日々の生活の中で、シンナーを吸うことは、食べたり寝たりすることと同じくらい日常のことで、それはストリートの中で暮らしていくにはなくてはならないものになっています。

しかし、彼らも未来の生活には憧れを抱いていて、学校に戻りたい、家族を支えていきたい、ファーストフードの店員、警察官、消防士、バスの運転手となって働きたいと思っている人もいます。



2009年2月8日マニラタイムスの日曜版

その一方で、未来に何の希望も持てない子もいます。それは今、絶望の中にいるからです。

アパリでは、フィリピンの薬物依存症者を支援するため、JICA草の根技術協力事業の準備を進めています。詳しくは次ページをご覧ください。

今春より国際協力活動がスタートします！

長い間準備を進めてまいりました、フィリピン・マニラにおけるJICA（国際協力機構）とのプロジェクトが今春より開始されます。このプロジェクトの大きな目的は、マニラの貧困層の地域で薬物を使用している人たちのために回復のミーティング（アパリミーティング）を開きたいと考え、そのミーティングを開く環境を整えること、そしてそのミーティングを継続させていくための人材（コアメンバー）を育成することです。

3年間で日本からマニラへの渡航6回と、マニラのコアメンバーを日本に招聘しての研修を2回、企画しています。主に現地で活動する日本人スタッフはダルクで回復した人たちです。日本のダルクで回復した人が、現地の薬物依存症者に何かメッセージを届けられればと思っています。マニラのコアメンバーも薬物依存症からの回復者で12ステップのプログラムを理解している人を考えています。

また、教会のシスターの紹介で私たちにタガログ語を教えてくれる方も見つかりました。私たちの活動のために祈ってくれている全ての方に感謝します。

提案事業の概要	
対象国名	フィリピン
事業名	マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業
事業の背景と必要性	<p>フィリピンには約200万人の薬物乱用者がいると言われる。その多くは覚せい剤乱用者である。覚せい剤はフィリピンでは“shabu”と呼ばれているが、日本の覚せい剤の隠語である「シャブ」に由来するものである。覚せい剤は、1gあたり約1500ペソであり、100ペソ程度の小さな包装単位でも入手が可能のため、貧困層においても使用が拡大する原因の一つとなっている。日本から持ち込まれた覚せい剤の問題に苦しむ薬物依存症者の回復支援をすることは、薬物乱用の歴史的背景からも妥当性の高いことである。</p> <p>マニラでは回復プログラムにつながる薬物依存症者は富裕層のみであり、貧困層にまでいき渡っていない。日本での回復プログラムの核であるミーティングをマニラの貧困層で開くことにより、誰にでも回復のチャンスがあるということを広く認知してもらう。アパリミーティングが地域で開催されることで貧困層の中でも薬物依存からの回復が可能となる。</p>
事業の目的	マニラの貧困層に薬物依存症者のためのアパリミーティングが開催される環境が整う
対象地域	フィリピン マニラ市
受益者層	依存症者本人とその家族、その他のワークショップ参加者(リハビリ施設職員、精神病院職員等) 約200名
活動及び期待される成果	<ol style="list-style-type: none"> 1、本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。 2、コアメンバーの本邦研修により、アパリミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。 3、現地ワークショップ(模擬ミーティング)を開催し、地域で薬物依存症についての理解とアパリミーティングに対する理解を深める。 4、ミーティングの際に使用するアパリミーティング・ハンドブックを作成する。
実施期間	2009年4月～2012年3月(3年)

絶賛発売中！！

アパリ理事・石塚、尾田、嶋根が執筆しています。本書は、従来刑罰しかなかった薬物事犯者対策に薬物依存症治療を導入したドラッグ・コート制度を日本でも創設しようとする日本で初めての書物です。

「日本版ドラッグ・コート」



定価：2,625円（税込）
発行：日本評論社
最寄りの書店でお買い求めください！

JICA（国際協力機構）のPCM研修に参加して

1/31～2/1と2/7～8の2回に分けて計3名がJICAで行われたPCM(プロジェクト・サイクル・マネジメント)研修に参加してきました。今回は特にJICA草の根技術協力事業で提案中の「マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業」をより質の高いプロジェクトにする為にも必須と考え、強く必要性を感じての参加となりました。

PCM手法は、開発プロジェクトの計画立案・実施・モニタリング・評価のために、JICAをはじめ多くの開発援助機構で用いられている手法です。PCM手法はプロジェクトの計画づくりを参加型でどのように行うかという「計画手法」と実施中のプロジェクトをどのようにモニタリングし、評価するかという「モニタリング評価手法」の2つが主な手法となっています。

今回の研修は研修者が2つのグループに分かれてモデルケースとなる架空途上国の事例をふまえて、援助を必要とする人々の抱えている問題や課題を考えながら行うものでした。内容的には、PCM手法を用いて、関係者分析、問題分析、目的分析、プロジェクトの選択、PDM(プロジェクト・デザイン・マトリックス)作成などをモデレーターとともに研修者が進めていく「計画手法」を用いた実践的なものが主でした。

研修を行うにあたっては、モデルケースに登場する架空の国際協力団体になりきって進めていくわけですが、それはそこに登場する架空の団体の「得意」とするものであって、自分自身の「得意」とするものではないのですが、自分の行っていることの思い入れなどが強く出てしまうあまり、本来の「研修のためのデモンストレーション」という焦点がずれてしまう場面もありました。しかし、そこは講師であるモデレーターが軌道修正しながら、無事研修は終了しました。

研修参加者は両日とも約20名で、すでに国際協力事業に携わっている方たちが多く、様々な情報交換などのコミュニケーションがとれたことも、今後私たちが国際協力事業を行っていくにあたり大変参考になりました。

今回この研修を通して、手法の方法論だけでなく、途上国の現状理解、開発援助の課題、難しさを理解することができました。また、PCM手法の特徴である参加型、一貫性、論理性は、人々が協力しあって共に考え、作り上げる行動の基本として、さまざまな活動に広く応用、活用できるのではないかと感じました。



PCM研修のようす
JICA地球ひろばにて

家族のための連続講座

薬物依存症と家族の対応について(10)

「共依存って悪いの!？」

カウンセラー 町田政明

共依存についてどう考えたらよいのか?分からないことがあります。共依存という言葉がいつの間にか独り歩きをしてしまったのか?いろいろな考え方があり、分からなくなってしまいます。今回はこの辺を考えてみたいと思います。

共依存とは?

米国のソーシャルワーカーで1970年代にはじめて「AC(アダルトチャイルド)」ということを行ったクラウディア・ブラックが、アルコール依存症の回りにいる人たちに注目するようになり、同じ頃に「共依存」という言葉が言われるようになりました。

同じく米国でアルコール依存症の病院や施設のカウンセラーをしていたロビン・ノーウッドが、1988年『愛しすぎる女たち』の本の中で言われる、「愛しすぎる女たち」こそは「共依存の女性」そのものを語っています。そこでは共依存を「愛しすぎる中毒」という言い方をしています。

メロディ・ピーティは1999年の著書『いつも他人に振りまわされる人たち』で共依存のことを詳しく書いており、共依存のことを「必要とされる必要」と言っています。

最初に使われていた頃は、アルコール依存症者の配偶者をさして言われていましたが、だんだんとアルコール依存症者の配偶者のように、相手にのめり込んでいき、自分がなくなり苦しむようになる状態を人間関係の嗜癖ととらえるようになりました。これは自分と相手の境界線がなくなり、自己喪失している状態といえます。

何か困っていると相手のことが気になるのは、人間関係では良くあることではないでしょうか。そして愛しているのならば、どうしても何とかしてあげたいと思うのは、普通のことだと思います。それが自分の保身だとしても、どれだけの人か自己保身のない無私の愛を提供できるでしょうか。

共依存とは「反応」ということもできると思います。誰か困っていたら放っておけないというのが、普通だと思います。依存症の正しい知識がなければうまく対応できないので、まじめな人はさらに何とかしなければいけないとハマッてしまうのではないのでしょうか。良い言い方をすれば、「思いやり」ということもできます。お世話好きの体質と依存症に対する知識のなさが、世話焼きを嗜癖的にしてしまうのではないのでしょうか。ここまで拡大して共依存を考えると「共依存」そのものが分からなくなります。

共依存からの回復

共依存とは相手と自分の境界があいまいとなる自己喪失の状態ですから、共依存からの回復とは自分を取り戻すこととなります。共依存の元は人を思う気持ちであると思うのですが、これから回復するという意味ではありません。過度に人にハマッてしまったので、バランスを取り戻すことだと思います。つまり相手ばかりにエネルギーを注いでいたのを、自分に注ぐということではないのでしょうか。また、相手から全く離れて冷たくすることではないと思います。相手のニーズだけではなく、自分のニーズに目を向けバランスを良くするという事です。

いきなり自分に目を向けなさいと言っても、体質的にできなくなっている人が多く、なかなか自分に目が行きません。そのため、依存症と共依存の知識を勉強することによって、実は相手の回復にとって必要であるということを知ります。共依存の問題に目を向けるとだんだんと相手に目が向かなくなり、自分のことに目が多く行くようになります。その意味で、依存症の勉強から入っていくのが良いように思います。

文化の差

共依存を考えていると共依存の言葉が生まれた米国と日本の文化の差を考えさせられます。米国では「個」を大切に「個の確立」を幼い頃から強く言われ、そのように育っていきませんが、日本では、相手と境界線をきちんと引くことに慣れていません。家族なら助け合うものだから何とかしようとし、相手を手放すのが苦手です。

手を放し、愛を持って見守る「厳しい愛」より、どうしてもすぐに手を出す、世話焼きの「優しい愛」にいつまでもつきます。日本では「困っていたら助けなさい、自分のことより他人のことを優先しなさい」というような自分を犠牲にすることは美德として、長い間教えられてきました。

共依存って悪い!?

共依存を広い意味でとらえ、「反応」とか「思いやること」と考えると、とても良い性質に思えます。バランスが問題で過度にならず、相手を思いやることはとても大切なことであり、今の世の中で一番失われている特質ではないかと思えます。共依存は「反応」ですから人は時にはバランスを崩すこともあります。人間関係ですから、必要に応じて人に入りこんで、支配したり支配されたりすることがあります。それが相手の病気やピンチを救うことがあり、それが必要なこともあり、それが過ぎてしまうこともあります。共依存の家族は、その時は自分の体質と知識のないところで、共依存という反応をするしか、自分を守ることができなかったのだと思います。

依存症と共依存の知識を勉強して、その体質「共依存」を活かして世の中に潤滑油になってもらえると、世知辛い世の中ももっと良くなるのではないのでしょうか?

自分のことしか考えない人がいる中で、このように人のことを考えるのは、高等で崇高な人間らしい行動で、「共依存は世界を救う」というのもオーバーではないのでしょうか。

家族の体験記
好評販売中!

『ギャンブル依存症に悩む
家族の物語
～絶望から希望へ～』

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円
発行：ホープヒル
(アパリで販売中)

家族の体験談（大麻のケース）

「ハイヤ - パワ - に導かれて」

大麻にはまってしまったのは、1978年生まれの長男です。家族は私たち両親と娘、息子の4人家族です。親としては、息子に人間性豊かな人に育ててほしいと願い、そのような趣旨で建学された中高一貫校を勧めました。その学校で先生や、友人と今の大切な人間関係を作ることができました。その後2部の大学を自ら選び卒業しました。卒業時、進路が決まらず、全国をヒッチハイク等で廻っていましたが、親は息子が見聞を広め自分のやりたいことを見つけてくれればと思い見守っておりました。

その息子が2003年3月北海道北見署で大麻所持により逮捕され、懲役1年執行猶予3年の判決を受けたのです。

北見署から「息子さんから紛失届けの出されていたザックが見つかったが、中から大麻が出てきたので出頭するように。」と連絡を受け、まさかわが子が-と本当に驚き体が震えました。

その事件以後、家族全員で大麻や生き方について折に触れ話し合うようになってきていましたが、2004年当時息子は「大麻は体に良いことはあっても悪いことはない。現に大麻を使っている人にはすばらしい人がいる。おかしい人はいない。」

「依存性もない。止めようと思えばいつでも止められる。」とっていました。

しかし、親の目から見れば、明らかに息子は以前と違っていました。本来持っていた朗らかさや優しさがなくなり、些細なことで苛立ち、すぐ怒り、親の行動や世の中を斜めから見て批判ばかりしていました。

私はどんな事でも最終的には自分自身が事実から判断するしかないと考え、本人を信頼して具体的なことで気づいた時に家族全員で話し合うことにしました。けれども解決の目途は立たず、妻だったか娘だったか忘れたが、息子の部屋から大麻を見つけ出して隠したり、話し合っているうちに妻が興奮して息子と一緒に死のうと言ったりしたこともありました。

1回目の執行猶予が切れるころになっても息子は「依存のどこが悪い。40過ぎまで親のすねをかじるつもりだ。」とっていましたし、放浪(?)の先々でアルバイトをしては、その日暮らしの生活をしていました。この頃は親も心配で寝られませんでした。本人もほんとうにつらかったらうと思います。

どうにかしなければと考えていた時、ふとしたきっかけで県の精神保健福祉センター - を知りましたが、何も行動を起こさずに日が過ぎていきました。

一方、沖縄を放浪していた息子は、卒業した高校の恩師が開いているフリ - スク - ルでAさんと知り合っていました。Aさんは息子が大麻にはまっていることを知り、生活を改めるよう説得し、自分の会社で働きながら進路を見つけるよう話を進めてくれていました。私たち家族は本当に喜んでいました。これで息子も社会参加ができると。あと数日で沖縄へ出発というある日、息子は京都大学で行われるイベントに出かけましたが、その途中で大量の大麻を持っていたため、執行猶予期間経過後まもなく再度逮捕されることとなりました。

藁をもすがる思いで、以前知った県の精神保健福祉センター - へ相談に行きました。そのとき、薬物事犯で逮捕された刑事被告人を支援しているアパリを紹介されました。後は運命の糸に導かれるような経過をたどり、当日のうちに尾田事務局長と連絡がとれ、その後奥田弁護士を紹介され息子の弁護を引き受けてもらえることが決まりました。

勾留中に尾田事務局長、奥田弁護士と面会や手紙のやりとり等で、息子はアパリの施設に入り薬物から脱出するためのプログラムを受ける道を自らすすんで選びました。

裁判ではアパリやダルクの実績と尾田事務局長、奥田弁護士のご尽力により息子は懲役3年執行猶予4年保護観察付という判決を受け、即研修施設のある藤岡へ向かいました。

息子の受けた研修は共同生活をしながら自分自身のことを話し、ほかの人の話を聞くというミ - ティングを通して、依存症を正視し、依存症から抜け出しさらに今までと違った考え方、生き方を模索するというものでした。息子が藤岡で研修している時、私たち親も月2回の家族教室に上野に通いました。そこでカウンセラ - の先生や、家族会のみなさんから本当に多くのことを学びました。

「薬物依存」 DVD販売中!

アパリが作成したDVDで本人の体験談や、近藤恒夫の話が約30分間収められています。学校での薬物乱用防止教育、行政の職員の研修で利用されています。

1枚 3,000円

FAX : 03-5830-1791
メール: info@apari.jp

ご希望の方はご住所、お名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。

平成12年作成

依存症は家族の病気ということもわかりました。そして依存症はどんなに努力しても家族だけの力ではどうすることもできないこともわかりました。

こうして、親も子も薬物依存から抜け出す道筋がやっと見えてきたのですが、アパリの施設を出てどのように実社会に踏み出していけるかが家族にとっては大きな問題でした。

本人はもっと不安が大きかったと思います。ですからアパリでの9ヶ月の研修が終わったとき、沖縄のAさんが大丈夫 立ち直れると息子を引き受けてくれたことは、家族にとって、ましてやAさんを尊敬する息子にとっては最上の励みであり救いでもありました。Aさんの会社では、息子のこれまでの何もかも承知でたいへん良くして頂いたのですが、事業立ち上げの期間ということもあり、給料がほとんど出ない等のため退社。数ヶ月郵政公社のバイトをした後、昨年3月に帰省しました。

こちらでの就職があるだろうかと思いましたが、高校時代の先輩が自分の職場に紹介推薦してくださり昨年3月から働き始めました。12月からは職場の近くにアパートを借り自活を始めました。念願だった経済的自立が実現し私たち家族は当然ですが、本人が一番うれしく自信をつけていると思います。

昨日は息子の31歳の誕生日でした。以前は身なりに構わない服装をしていたのですが、高価ではないけれど清潔なスタイルと明るい笑顔で帰ってきたので、心の持ち方でこんなにも違うものかとびっくりしました。久しぶりに家族全員集まり誕生日を祝いましたが息子の横顔が清々しく、私も幸せでした。なにかハイパ-パワー-が働いているように問題が解けることがあるということを経験した息子の大麻問題を振り返って感じています。

大麻乱用撲滅キャンペーン

大学の新入学シーズンを前に、大学生や若者の間に広がる大麻汚染を食い止めようと、警視庁組織犯罪対策部組織犯罪対策第五課、警視庁生活安全部少年育成課及び東京都保健局健康安全部は平成21年2月16日、「大麻乱用撲滅キャンペーン」を始めた。

期間は大学などの卒業、入学シーズンに合わせ平成21年5月15日までの3ヶ月間。大麻乱用の怖さについて大学で講演するなど大麻撲滅に向けた広報啓発活動、また大麻取締法で所持が規制されていない大麻種子の販売についても取り締まりを強化する方針。

初日である16日はJR新宿駅西口広場イベントコーナーにおいてイベントを実施。アパリもこれに協力をした。

イベントは組織犯罪対策第五課長 田代芳広警視より、同日から実施予定の大麻乱用防止緊急対策と、本イベントの必要性、大麻乱用の重大性等について説明、対策への協力を依頼し、「乱用者の六割は10～20代の若者。薬物は暴力団の資金源ともなっている。悪魔の道に足を踏み外さないで」との訴えから始まった。

その後、警視庁音楽隊による演奏。「世界のお巡りさんコンサート」などで、世界各国の警察音楽隊と共演し、海外でも好評な音楽隊は素晴らしい演奏で聴衆をひきつけていた。

続いて警視庁鑑識課、警察犬第二訓練所の新田係長をはじめとする鑑識課員と麻薬探知犬により、大麻臭のある複数の衣類やバッグの中から、大麻のにおいをつけた布を探し当てるデモンストレーションが行われ、麻薬探知犬が見事探し当てると観衆から歓声が上がった。次に大麻経験者の講話となり、ダルク職員らが大麻使用のきっかけや薬害と検挙に至るまでの悲惨な話とともに、乱用から更生にいたり、ダルクの関係者となるまでの経緯などについて語った。

最後に、元プロボクサーであり、昨年12月まで日本Sウエルター級1位であった、川崎タツキ氏によるインタビュー形式の講話。少年期に不良少年であったタツキ氏は暴力団組織に入り、薬物に手を染めたことにより薬物依存症者となり、その後ダルクに入寮、更生の道をたどり、2000年にプロボクサーになっていった経緯について話の中から、「薬物を使っていると家族や仲間を巻き込んでつらい思いをする。一時の楽しさよりも普通に暮らせる楽しさに目を向けてほしい」と訴え、イベントは終了した。



警視庁麻薬探知犬のデモンストレーション



川崎タツキ氏のインタビュー

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「悪夢は終わった」

アムス

アパリ発行
「Born・Again (ボーン・アゲイン)」
体験談 販売中!

2005年5月に第2版が発売になりました。体験談が13人分収められています。アパリではこの本を拘置所や刑務所にいる人への差し入れ用として使っています。

定価：1,500円
(会員価格:1,000円)

お申込はメールかファックスで
FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp
ご住所、お名前、お電話番号をご記入の上お申込下さい。

「左、左、左右、左、左、左右」刑務官のあの大きな声が今でも耳にこびり付いて離れない。もう二度と覚せい剤をやらない、あの時俺は自分にそう誓った。実刑4年の判決を受けて刑務所に服役していた。罪状は覚せい剤取締法違反だ。5年前の春、初めて警察に逮捕された。執行猶予判決を裁判所で受けてからわずか半年後に二度目の逮捕となった。初犯の場合は大抵執行猶予判決でパイになるのが相場と決まっている。だから出たらまた覚せい剤を使ってやろうと思っていた。そして案の定次の日から覚せい剤の再使用が始まった。その頃から覚せい剤を使う時はもっぱら部屋にこもって使うようになった。誰からの電話にも出ず外との接触をたって生活をしてきた。結果的にその事が原因で心配した親が警察と一緒に様子を見に来た。それが二度目の逮捕の原因となった。

自分の歯車が狂い始めたのは何時の頃からだろうか。それは多分離婚を経験した頃からだろう。離婚をした事、子供と別れた事、自分の心にポツカリと穴があった。その穴を埋める為に覚せい剤の使用を始めた。最初はDJの友達から購入し炙りで吸っていた。頭が冴え渡り空気が張り詰めた様な緊張感を感じ、その緊張感は言葉にならないほど心地よいものだった。それまで頭の中に渦巻いていた孤独、怒り、やるせなささえも言えぬ快楽という夢の中に吸い込まれて行った。喉が渴いた時に水を飲むのと同じ位覚せい剤を使うのが自然になっていた。プライベートに使っていた覚せい剤をいつの間にか仕事中に使う事も当たり前になっていた。ある日、営業の外回りの為に車を運転していると、隣にスクーターに乗った女性が並んでいるのに気付いた。その女性を見た瞬間にその女性の事が何故か興信所の人間に思えてならなかった。今思えばそれが追跡妄想の始まりだった。興信所がいろんな人間を使って自分の事を探っている。薬を使っている証拠を揃える為にしつこく自分の事を嗅ぎ回っている。これは間違いなく別れた妻に雇われているに違いない。猜疑心は次第に確信へと変わっていった。他にも不可解な事が身の回りで起こり始めた。同僚の女性の噂話が気になり仕事もままならなくなって来たのだ。通気口から「あの人は覚せい剤を使っている」「別れた妻から慰謝料をもらっている」「あの人は気味が悪い」そんな声が聞こえて仕事場に居られなくなった。その度に、トイレで時間を潰さなければならなかった。こんな状態では仕事を続けられる訳がない。10年間働いていた会社を結局辞めてしまったのだ。

振り返って見ると自分は22年間薬物を使い続けてきた。ビリヤード場の顔なじみの先輩に「これ吸ってごらん」と言われ手渡されたパイプの中には黒い塊りが入っていた。言われるがままに口を付けて吸ってみた。まるで鉄みたい重い煙が喉に絡みつき激しく咳き込んだ。その時はあまり大麻やハシッシの飛びは分からなかったが、何度か使用して彼女とセックスをした時に今までとは違った快楽を感じ始めて大麻の良さを知った。それ以来大麻は自分にとって快楽の為の物であって常に持ち歩く様になった。クラブでDJをしていたのでそんな時は大麻はベストマッチだ。耳が微妙な音を鮮明に捉え曲に立体感が生まれる。それ以外にも、何を食べても美味しかったりいろいろな人と話をするのがやたら楽しかった。大麻は自分にとって無くてはならない物になった。しかし大麻だけではレコードを回し続ける事に限界を感じ息詰まった頃にDJ仲間の一人からエクスタシー(MDMA)を貰い、それを食べてみると何と今までとは違ったとても言葉では言い表すことが出来ない程の快楽が体全体に走り、いっぺんにエクスタシーの虜になってしまった。気が付くと自分はDJをするときはエクスタシーを食べ、大麻を吸いレコードを回す様になってしまった。もう、これ以上の幸せは無いと思いつつの日か大麻とエクスタシーが自分にとって最高のドラッグとなり、このまま何時までも使い続けようと思うようになっていた。その当時は、ドラッグを使うことによる弊害など考えたことも無かったしドラッグによって精神的に落ち込む事も一度もなかった。それは、自分がドラッグに無力で支配されている状態なのにもかかわらず、沢山の刹那的な快楽を満たしてくれる事によってカモフラージュされていたのだ。

拘置所の中に居た時、中間施設が自分の身元引受人になるという内容の手紙が母から送られてきた。それは父の強い反対があったからだ。父にはこれまでどれ程迷惑をかけてきたかは良く分かっていたから自分はそれでいいと思った。ただ、その時は中間施設での入寮生活は自分にとって自信が無かったのであまり気が乗らなかった。8ヶ月の仮釈放をもらい中間施設に繋がった今、自分の生活や心境が少しずつ変わり始めてきた。

昔とは違う。ドラックを使っていた頃の自分が過去のものとなり、ドラック無しでの人生が
一歩ずつ歩み始めてきた。中間施設でのプログラムやミーティング、自助グループでのミー
ティングなどによって本来の自分を取り戻し、もうこれ以上あのドラックを使っていた頃の
苦しみや悲しみから解放され、そして、あの狂った悪夢は終わった。夢や希望を全て失った
自分に一つの光を与えてくれたのはこの中間施設の生活だった。施設に繋がった当初は強い
薬物欲求から薬を使う夢に悩まされた事もあった。しかし、回復プログラムを信じミーテ
ィングに参加したことや施設や自助グループの仲間に励まされたり優しい言葉をかけられたり
して他のアディクトの話を書くことで回復することの不安が徐々に無くなってきて、希望と
言う光が差し込んできている。素直に前向きな気持ちになってきている自分が今は好きだ。
今楽しみが一つある。施設のDJブースを使って好きだった皿回しを再びやり始めた。やっぱ
り自分にとってDJは本当にいいものだ。もう二度と薬物はやらない。先の事は分からないが
施設のプログラムに身を委ねる事が回復につながると信じている。



アパリ東京本部より



「赤い糸」無事監修を終えました

依存症監修をしていた人気携帯小説「赤い糸」の映画、ドラマの撮影が無事終了しまし
た。撮影は、早朝に集合してロケバスに乗り込み、鹿嶋にあるスタジオでリハビリ施設の
風景を撮ったり、また寒い中での屋外のシーンもありました。数分の映像を撮るために半日
から1日かけて多種多様な技術スタッフが出演者とともに作り上げているといった一体感があ
りました。

多くの技術スタッフ・プロデューサー・監督が何度もアパリやダルクに足を運び、薬物依
存症について、リハビリについて熱心に学んでいかれました。アパリストッフは打ち上げの
席にも招かれました。最後に監督やプロデューサーのご挨拶を聞きながら、約1年もかけて作
りあげてきたご苦労を思い、込み上げるものを感じました。

薬物がもたらす社会への影響、本人のみならず周りの人たちにこれほど影響を及ぼすもの
なのか、とてもわかりやすく描かれている作品になったと思います。

警察庁薬物再乱用防止モデル事業の終了

平成19年10月より、警視庁との間の業務委託契約により、23区内の警察署で薬物事犯で検
挙され、即決裁判で単純執行猶予となった人のうち、任意で受講を希望する人に対して薬物
再乱用防止モデル事業を実施してきました。毎週土曜日の午後、簡易薬物検査を実施すると
ともに、検査後、日本ダルクのグループ・ミーティングに参加してもらい、月に1度は医師、
弁護士等の専門家の講義を受けてもらいました。

平成21年3月末でこのモデル事業は終了することになりました。今まで長期間に渡り参加し
続けてくれた受講生の皆さまお疲れさまでした。

今後も継続して同種の事業を展開していきたいと考えておりますので、関係諸機関から
のご連絡をお待ちしております。



新規会員 募集中 !



平成21年4月より新規会員（正会員・賛助会員）を募集します。ご入会していただいた方
には、会報「フェローシップ・ニュース」を毎号お届けします。また、書籍購入の割引や公
開講座・フォーラム、自助グループ開催に関する情報提供等、様々な特典がございます。ア
パリは立ち上げて10年目に入った組織です。今後も、薬物関連問題の新たなシステムとネッ
トワーク構築のために全力を尽くしていく所存です。アパリに関するご意見ご要望がござい
ましたらいつでもご連絡ください。

【年会費】 正会員：12,000円 賛助会員：6,000円

【期 間】 平成21年4月1日～平成22年3月31日まで

【郵便振込】 番号：00160-7-136870 アパリ東京総本部

【銀行口座】三菱東京UFJ銀行 笹塚支店 普通 0929745 名義：アパリ東京本部

アウェイキングハウスとは振込み先が異なりますのでご注意ください。

ドラッグ・ダイヤル

最近若い人からの大麻
の相談が増えています

こんな質問が多いです。
「何で大麻はダメなの？」
「どんな害があるの？」
「止めようと思うんだけど
どうすればいいの？」

どうぞお気軽にご相
談ください。
(プライバシーは固く守
られます。)

電話相談は
月～金の10時～18時
：03-5830-1790

メールでの相談は随
時受け付けていま
す。
メ-ル：info@apari.jp



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部
〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター
(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

- 【入寮条件】
1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
2、男性(年齢制限なし)
【入寮期間】
基本的に13ヶ月
【入寮費】
月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成21年3月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

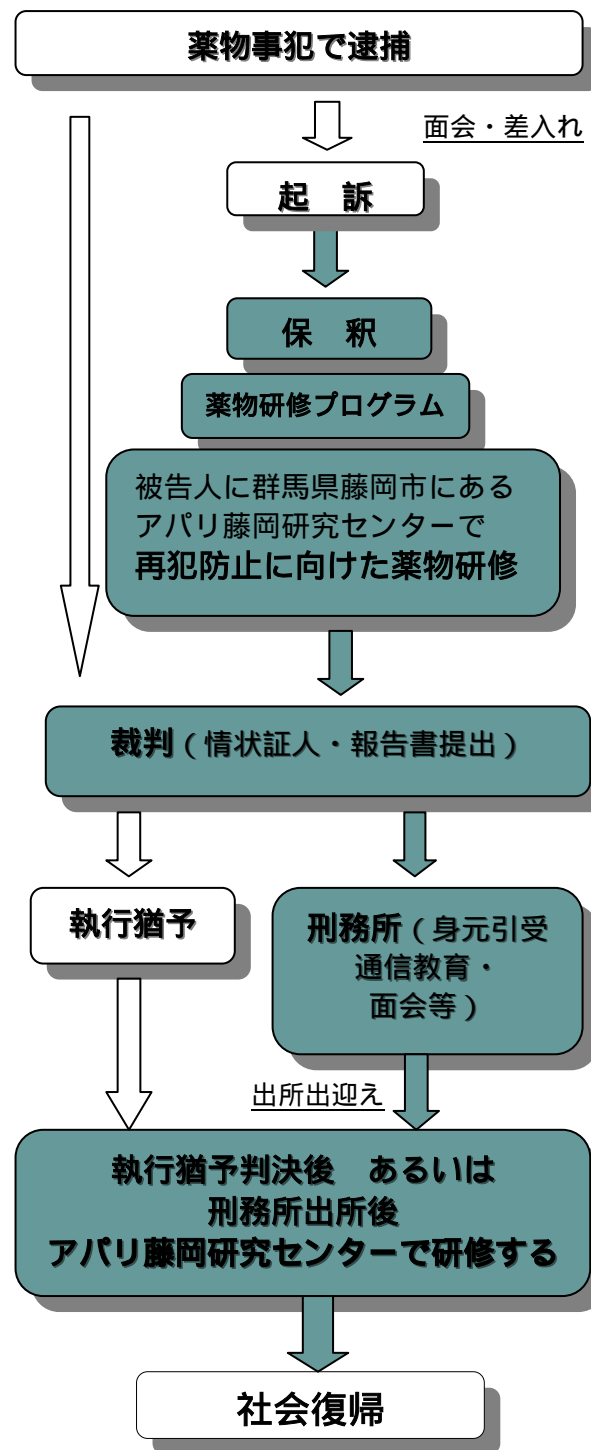
薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本における薬物事犯の再犯率は50%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**5%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<家族教室>

「エクステンディッド・ファミリー・クラブ」

日時	テーマ	ファシリテーター
3/2(月)	回復とは	家族自助グループメンバー
3/16(月)	本人と家族のみぞ	町田政明
4/6(月)	回復の奇跡	町田政明
4/20(月)	回復に必要なもの	町田政明
5/4(祝月)	依存症は治るのか?	町田政明

- 【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者
【日時】第1・第3月曜日18:30~20:30(祝日も開催します)
【場所】アパリ・クリニック上野2階
【参加費】3,000円(ご夫婦などでの参加は2名で4,000円になります)
【内容】カウンセラーの町田がファシリテーターとなり家族との分かち合いを行います。法律问题については事務局長の尾田が担当します。【お問合せは東京本部まで】

<個別相談・カウンセリング>

- 【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円
【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明[元神奈川県立せりがや病院勤務、ホープビル代表、寿アルク理事] 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。遅れていらした場合は時間が短くなりますのでご了承ください。